

今岳神社

南さつま市坊津町久志に今岳いまだけという山があります。高さは260メートルほど、山頂が三角に突出し、遠くからも際立つて見えます。

昔々、この山の麓ふもとの末柏すえかしという集落に住むおじいさんが、朝早く浜辺に出掛けました。防波堤ぼうはてもない頃のこと、砂浜の先は果てしなく広がる海原うみはらです。ところが岸辺に小さな舟が二そう打ち上げられていました。楠くすのこの幹をくりぬいて造ったものでしたが、半ばこわれかけており、中から子どもこどもの泣き声なきこゑがします。不思議に思っおもって近寄ちかってみると、たいそう美しい緋ひの服ふくにくるまれた幼い女の子がいました。

「これは身分ある人のお子じゃっどな。何かわけがあつて流されたんじやろう。ぐらしかかわい（かわいそうな）ことじゃ」と、おじいさんはその子を舟から抱き上げました。そして、このままにはしておけないから我が家に連れて行こうと、背中におんぶしたのです。家に帰ると、庭に置いていた米臼こめうすの中に降ろしました。



ところが、その女の子はあつという間に、小さな石になってしまいました。おじいさんは驚き、「なんとまあ、神様じゃったか」と、家族を呼び集め拝んだのです。それから、この石を今岳の山頂にお祭りし、今岳神社いまだけじんしゃ（今峯権現社とも呼ぶ）を建てたと言われています。

ところで、舟に乗っていたのは機織はたおり姫ひめで南の方から流されてきた、あるいは姉妹2人いて、妹が流されてきたなどという別の言い伝えもあります。子どもが泣いていたところは、いつしか「泣き子らん浜」と呼ばれるようになったそうです。

今岳は海上からもよく見えるので、昔から航海の神様として崇あがめられ、海岸からの参道まゐりみちには明治の初めまで鳥居とりいがありました。大晦日おおみそかの夜には、参拜まゐりする人々の提灯ちていが山の頂へと連なっていたそうです。また、戦時中は出征した家族の無事を祈願いのりする人もおりました。現在は国道226号線からの登り道があり、山頂の小さな社やしろの左右には「大漁記念」と彫られたものなど数基の石灯籠いしとうろうが寄進いしんされていて、往時むかしをしのぶよすがとなっています。



原話『坊津町郷土誌』前さつま市坊津町久志 鉢窪 清

文／有馬英子 絵／二石綱夫